

氏名	松本 勝治郎
学位の種類	医学博士
学位授与番号	乙 第649号
学位授与の日付	昭和49年12月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	急性脳腫脹の成因に関する実験的研究 —脳血管トーンヌスに対する神経支配について—
論文審査委員	教授 田中早苗 教授 砂田輝武 教授 高坂陸年

学位論文内容の要旨

急性脳腫脹発生の基礎となる脳血管トーンヌスの低下に関して、神経性因子がどの程度関与しているものかを検討するために33頭の犬を用いて脳幹、視床下部に針を刺入し、刺激および破壊実験を行なった。i) 脳幹、視床下部破壊を行なった際、脳血管のCO₂反応性の減弱傾向を示す例はあっても決して消失はしなかったことより、CO₂の脳血管に対する作用としてneural mechanismは大きな役割を演じていないことが推察された。ii) 脳幹破壊により自己調整機構に対するneural mechanismの存在することが明らかとなった。iii) 針の刺入、刺激、破壊を行なうと血圧と関係なく脳血流が増加し、頭蓋内圧が上昇することにより、脳幹、視床下部に脳血管トーンヌスに直接影響をおよぼすneural mechanismが存在することが判明した。しかしながら、これらの反応性は一過性のものであり、急性脳腫脹に発展した例はみられなかった。

実験的に硬膜外バレーン法などにより高度な脳のhypoxia状態をつくと容易に急性脳腫脹が生じてくることを考えるとneural mechanismは確かに関与はしているが、これのみが主役を演じているものではないと思われる。

論文審査の結果の要旨

急性脳腫脹の成因に関する実験的研究である。即ち、急性脳腫脹の際におこる脳血管トーンヌスの急速な低下の原因として、神経性因子は何等かの程度に関与しているが、

それは一過性のものであり、大きな役割を演じてはいないことを理論づけた点において価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。